ルーマニアの文人政治家ディミトリエ・カンテミール（一六七三 - 一七二三）について

直野 敦

一橋論叢 76(6): 602-608

1976-12-01

Departmental Bulletin Paper

publisher

http://doi.org/10.15057/11657
デミトリエ・カンディール（在位一六五二年）は、スペイン人としての身分を認めるため、ローマへ亡命した外交官として大きな役割を果たした。彼は、特にイスタンブールを含むトルコの支配下にあったバティカンとトルコの文化と接触する重要な関与者であった。デミトリエは、彼の言葉で、ローマ人とトルコの文化的な関係を深くし、両国間の平和を図った。彼の努力は、後にローマとトルコの関係に大きな影響を与えた。

この時代のトルコ世界では、キリスト教徒とイスラム教徒との関係が緊張していた。デミトリエは、両者の間で相互理解と平和を促進するための努力を続けた。彼の言葉が、後にトルコとローマ世界の関係に大きな影響を与えた。デミトリエは、ローマとトルコの文化的な関係を深くし、両国間の平和を図った。彼の努力は、後にローマとトルコの関係に大きな影響を与えた。
ムール大帝は、こうして、コンスタンティノプルの息子と孫の二代にわたる文人を逮捕し、バルカンとロシアの文学史について
ながっている。

一大の圧迫、タタールの侵入といった不利な条件の中で
経済的にも困難、一時は経済的、その売却で生計を支え
ていたコンスタンティノプル。コンスタンディン・コンスタンティノプルは、険国のポーランドへ
移住して働いたが、脱出後、コンスタンチンヒッカ＝ペド
が一六五八年にロシアの大貴族たちに推されて君主の地位
が与えられたのは、もともと劣っていた身分で教養もなかった（彼
の名前を署名する以外に読む書き込みがなかった）ので、
大貴族たちの意のままになる人物と目されたからである。そし
tで、実際、一六九三年の死にいたるまで、彼は大貴族たちの從
順な代謝者として王位に留まったに過ぎない。兄のアンドレ
イェフマニク出身の修道僧で、イザベルとおおよそイスタイに留学し
て、後に、ロシアのワラキヤ語公国の首都ブクレシュティで哲賢
の子だったが、不調だった哲賢で、最高の条件を準備していた。彼は、
まず、十年にあったばかりの幼い身ながら、哲賢のそのような姿
や、兄弟たちの教育のために、最高の条件を準備した。彼は、ク
ゥバ＝ペドのもとで、ギリシア.jface会スラゴヤ修道院を修得した。さらに、ラテン語を勉
強するため、ギリシアとラテ
ン語の両言語に通じる哲賢を学んだ。同時に、彼は、哲賢の
ときの日本をトウゴル語
で修得している。また、この時期からすでに音楽への関心を持
ち始めていた。

一六九三年三月の夕食の後、まだ十八歳になか
ったデミトリエは、大貴族たちによってロシア＝ペドに選出

608
ロシアの策謀のためにトルコの官憲に逮捕されそうになっ
た時の彼に隠し家を提供したのも、フランス大使フェリカルで
あった。また、一七〇一年にスタンゲル・ド・トルコとし
て就任してきたピエートル・デ・アドゥイ記の親交を通じて、後
にピョートル一世との間の同盟関係の結
ばれたという。しかし、この当時のデミトリエ・カントミ
ールは、自分の政治的立場を表面に出さず、彼を陰でるすす
めるスタンティン・プルノマーヴィーズとともに絵画をはかってい
る。ロシアとトルコの関係が緊張するにつれて、トルコ宮廷は、
親トルコ派で、またロシア公国の動揺も監視する能力を持
った人物をモルドヴァに据える必要に迫られて、親トルコ派
と目されていたデミトリエ・カントミールを急ぐに任命
とされた。こうして、一七〇一年十二月にモルドヴァの首都キドスに
帰ったデミトリエ・カントミールは、彼の長年の望願であっ
た中央集権国家の樹立とトルコからの解放という二つの目標を
表現するための具体的政策の実現にとどまった。
一七年四月末にピョートル一世との間に正式に条約を結び、ト
ルコにたいする共同作戦の準備にとりかかった。五月末にロシ
ア軍はモルドヴァへ進撃し、ディミトリー・カントミールは、
トルコとの戦いを呼びかけ、ロシア軍と並行し
て末命を、死にすることを十二年之久をピョートル一世の世
に封じている。ロシアは、元老院議員として過すことになる。
しかし、一七年五年頃執筆し
た動物寓話「経文字物語」にある。これを、恐らくロマニ
ア語で書かれた最初の散文小説として、ロシアの文学にあら
されるという評価が存在する。現在のロマニア語と比
べて話題なども、アイル語に影響された複雑な形をとり、作者
自身が古典的な言語やロマニア語ともに創造した新語を横
断していっている。ロマニア語は、現代のロマニア語の戦
争の代表とされている。
（略）


